

北九州芸術劇場＋市民共同創作リーディング

平成27年度

Re: 北九州の記憶

戯曲集



はじめに

私たちが記録として知っている「街の歴史」には当然のことですが、私たちの身の回りの、ごくごく個人的なことについては記されていません。ですが、確かに当時を生きた人達はその場所に住んで、日々を暮らしていました。その時代に生きた家族のこと、仕事のこと、結婚のこと・・・様々なエピソードの「個人の歴史」が集まるとそれもひとつの「街の歴史」になるのではないのでしょうか。

「Re:北九州の記憶」では、北九州市に暮らす高齢者の方々に、地元の若手作家がインタビューを行い、1つのエピソードから発想を得た新しい物語を作りました。

この作品を通して、過去も未来も主役はこの街に暮らす私達である事に気付く事、そしてこの作品達が、この街の財産となる事を目指しています。



目次

鳩と世界と日本と八幡とく国立霞ヶ丘競技場にてく	作	鵜飼秋子	1
保塚さんと夕方の小倉	作	穴迫信一	13
かぞく	作	穴迫信一	21
ユキエとミドリ	作	塩津順子	35
コーラの噂	作	塩津順子	47
天井	作	守田慎之介	54
踏切のそばの小屋	作	守田慎之介	67
あがる	作	脇内圭介	83
籠の中の男たち	作	脇内圭介	98

鳩と世界と日本と八幡と〜国立霞ヶ丘競技場にて〜

作 鴉飼秋子

【登場人物】

みゆき

寛一（みゆきの叔父）

寛一とみゆきが座っている。

寛一           なあ。

みゆき       ・・。

寛一           いい加減いいんやないか。

みゆき       ・・。

寛一           暗くなったし、だあれもおらんし。

みゆき       ・・。

寛一           さすがに俺だって怖くなってきた。

みゆきはうつむいている。

寛一 わかるか。

みゆき ・ ・ 。

寛一 囲まれてんだ。

みゆき ・ ・ 。

寛一 ほら、かすかに音がするやろ。

みゆき ・ ・ 。

あたりの気配に耳を澄ます。

寛一 なあ。

みゆき ・ ・ 。

寛一 昼間はあるだけ賑やかやったのになあ。

みゆき ・ ・ 。

寛一 おい。

みゆき ・ ・ 。

寛一 返事しろって。

みゆき ・ ・ 。

みゆきは依然として黙ったままうつむいている。

寛一 帰ろうか。

みゆき

・  
・  
・

寛一

落ち込むんなら宿でもできるし。

みゆき

・  
・  
・

寛一

夜になってまでこんなところにおる必要ないやろ。

みゆき

・  
・  
・

寛一

そんなにおりたいんやったら明日もあるから。まあ、なんとか入ろうと思えば入れなくはない。

みゆき

・  
・  
・

寛一

まあちよつと苦労するけど。

みゆき

・  
・  
・

寛一

なあ。

みゆき

・  
・  
・

寛一

はああ（溜息）、どれくらいおるんやろうか。十、いや二十・違うな、百。

みゆき

・  
・  
・

寛一

いやもしかしたら千。もしかしてもしかして八千！

みゆき

・  
・  
・

寛一

（想像して辺りを見渡し）うえー。

みゆき、わーつと急に泣き始める。

寛一

おおおっ！

みゆき (派手に泣き続ける)

寛一 なんだなんだ。

みゆき (泣くのをやめる)

寛一 ・ ・ ・ どうした！

みゆき ・ ・ ・

寛一 ん？

みゆき ・ ・ ・

寛一 ・ ・ ・ また、だんまりか。

みゆき ・ ・ ・

寛一、あたりを見渡し。

寛一 注目、されとるな。

みゆき ・ ・ ・

寛一 (小声で) 変なやつらやって、じーっと監視されとる。

みゆき ・ ・ ・

寛一 もしも、あいつらがこっちに近付いてきたら・ ・ ・

みゆき ・ ・ ・

寛一 もしも、気が変わって攻撃したら。

みゆき、いきなり立って走り始める。

寛一

おい、おーい。

みゆき、半径5メートルくらいの円を描いて走り元に戻る。

みゆき、座る。

寛一はその場を動かず、みゆきの様子を見ている。

寛一

お前みたいなのやつは大変だな。

みゆき

・・・

寛一

婿殿は苦勞するやろうなあ。

みゆき

婿じゃない。

寛一

お？

みゆき

あいつは婿じゃない。

寛一

ああ、はいはい。

みゆき

私が嫁に行く。

寛一

そうでしたね。

みゆき

(ふたたび泣き始める)

寛一

お前、嫁に行くんがいやなんか。

みゆき

(泣き続ける)

寛一

なら、結婚やめろ。

みゆき

どの口がおっしゃるのでしょうか。

寛一 ああ？

みゆき 跡取りがないじゃないですか。知つとるくせに。

寛一 まあな。

みゆき うちが女三人姉妹や。

寛一 今からはそんな考え方はもう古いぞ。

みゆき ・・・。

寛一 家のために結婚するなんてのは。

みゆき そんなことはどうでもいいんです。

寛一 いや結構大事な話やろ。

みゆき それよりもなんですか。今日のは。

寛一 今日の？ここでみたあれのことか。

みゆき 日本人はどこにいった。

寛一 は？

みゆき おらんやったじゃないですか。

寛一 なにが。

みゆき 200メートル走。

寛一 そうやったかな。

みゆき 製鐵の選手は。

寛一 そういや見とらんな。

みゆき どうしたんやろうか製鐵は。

寛一 さあ。

みゆき 途中で事故にでも遭ったんやろうか。

寛一 予選で落ちたんやないか。

みゆき 予選で？

寛一 本選まで残らんかったんやろ。

みゆき そんなわけあるか。

寛一 あるわ。なんてたって世界のスポーツの祭典やからな。

みゆき 絶対途中で事故にあつたんです。

寛一 そんなら新聞に出とるわ。

みゆき 今日の新聞に出とらんやつたやろうか。

寛一 出でない。

みゆき あなたは今朝、汽車の中やつたんやから読んではいけないでしょう。

寛一 お前なあ、俺をなんやと思つとるの。新聞記者ですよ。

みゆき そんなら情報の情報は新聞が出る前につかむわ。

寛一 製鉄は本当にオリンピックに出とるんやろうか。

みゆき 出たんやろ、けど予選で落ちた。製鐵どころか日本はみんな落ちた。

寛一 それじゃ私は東京くんだけまで何を見に来たんか。外国人か？

みゆき オリンピックやろ。

寛一 オリンピックに来てからというもの外国人しか見ていない。

みゆき オリンピックが見たいって言ったのお前やないか。

寛一 特に見たくはない。

みゆき 連れてきてやつたの誰や。

みゆき

寛一おじ。

寛一

なら文句いな。

みゆき

私は・・外国人のために自分の退職金を使い果たしてしまったんやろうか・・。

寛一

使い果たしたんか！退職金。

みゆき

小倉から東京の汽車代、それと宿泊代、一生に一度のオリンピックのため、に今豪遊しようと決めましたから。

寛一

あーあ。

みゆき

でもその旅は東京で外国人を見るための旅だったとはね・・

寛一

それなら海外にでも行って本物の外国人を見れば良かったのにな・・。

寛一

そんなに日本人が見たかったんならな、200メートル走とかそんなマイナーな競技をみらんで、重量上げとか、日本人、大活躍の競技を選べばよかったですやないか。

みゆき

そんなに興味やらあるか！

寛一

知るか！

みゆき

私は体育教師です。200メートル走を通じて陸上を教えているんです。

寛一

やったら外国人っていつでも世界のトップアスリートや。

みゆき

よおく見て勉強したらいいやないか。

みゆき

勉強とか今更意味ないし。

寛一

あ？

みゆき

もう教師じゃないし。

寛一 ああ、そうね。

みゆき これからはただの嫁やし。

寛一 ・ ・ ・

みゆき、ふたたびわーっと泣き出す。

寛一、周りに目を向け。

寛一 わ、わ、わ、わー！。

寛一、座ったまま頭を下げ、手で抱える。

頭のすぐ上を何かが通っていった。

寛一 おおー！。あぶねえ。

寛一、みゆきを見る。

みゆきは、泣き止み平然とした顔で座っている。

寛一 なんか、忙しいなあ。

みゆき 製鐵の陸上が八幡を飛び出し世界を相手にすると、一体どうなるかそれが見たくて来たのに・・・なぜ製鐵がないんですか！

寛一 しょうがないやろが。(また頭を下げて上を見上げる) お、おー！。

みゆき

世界の八幡なんです！

寛一

八幡は世界を相手にしても勝負にならんやったんよ。

みゆき

その現場を見たんか。

寛一

いや見とらん。(また遠くからやってくる何かを見ながら) おい、おい、

おい！

みゆき

見てもないことをなぜそんなに確固たる自信を持って断言するのか。

寛一

製鐵が本選におらんの見れば自然と想像できるわ。

みゆき

自分の目で見て確かめてもないことを、まるで見たかのように断言する。

それでも新聞記者か？

寛一

うるさい。(手でみゆきの頭を押し下げ) アブねえ。攻撃されとるんやろ

うか。いや、暗くておるんが見えんのかな。

みゆき

私は自分の目で見たものしか信じない。

寛一

なら見てみてどうやった。

みゆき

なにがです。

寛一

今日、この場で、製鐵を見なかった。

みゆき

・・・。

寛一

正直に。八幡はどうなった。

みゆき

八幡は・・・八幡は日本一。

寛一

おう。で。

みゆき

・・・世界一。

寛一

おう。

みゆき

・私は誰よりも早く製鐵に陸上競技を教わり、その楽しみを子供たちに教えてきました。陸上を小学生に教えるそんな都市がどこにあります？どこにだってありませんよ。陸上競技の先進都市これが八幡です。

寛一

日本ではな。

みゆき

・・・

寛一

日本一の八幡、これは俺も間違いないと思うわ。

みゆき

・・・

寛一

井の中の蛙なんやなあ。

まわりからバサバサバサーと音がする。

みゆき、あたりを見渡す。

寛一

(遠くを見ながら) 来るか？来るか？・・・来んのか。

みゆき

・・・

寛一

「今8千羽のハトが一斉に飛び立ちます」とかカッコつけてテレビで言いつつたぞ。けど、実際来てみるとあの通りや。飛び立ったはずが結局スタート地点に戻ってきよる。

みゆき

遠くに行かんのやるか。

寛一

巢だと思つとるんやる。開会式のために長いことここにおつたんかもしれんなあ。

みゆき

白いの、あれ、みんなそうなんやろうか。

寛一　ズラーつとな。どおりでファンが多い訳よ。

二人は自分の座っている足元を見る。

みゆき　見てみらなわからんことがあるな。

寛一　・・・そうやな。

みゆき　やってみらなわからんこともある。

寛一　けどな、蛙だってハトだって井戸に戻ってくることはできる。

みゆき　・・・。

寛一　そう思うけどな。

みゆき、指でピストルの形をつくり天へ向かってかざす。

みゆき　よおい、ドン！

ハトが一斉に飛び立つ。

## 保塚さんと夕方の小倉

作 穴迫信一

### 【登場人物】

- 保塚 (73) ……高齢者施設で生け花の教室をしている  
盧 (ロ) (25) ……中国人、女性  
胡 (コ) (27) ……中国人、女性  
チャウ (24) ……ベトナム人、女性

現代、居酒屋。

一つの狭いテーブルにはビールジョッキが四つと不格好にでかい餃子が大量に並んでいる。他のテーブルも埋まっているようで、店自体がわいわいと騒がしい。

盧、何かイライラと話している

保塚、ニヤニヤと聞いている

胡、それほど興味を示さず

チャウ、真剣なまなざし

盧

店長が先に教えてあげれば良かったんです、それでできないことを新しく

入った人、分からないのに、他の人知らないから怒るでしょ、怒られるの嫌です皆、皆やめます。

仕分け出来ない、オーダー取れない、喫茶作れない、料理運んだらこぼす、当たり前です片手で持つてる、全部店長がちゃんと教えてあげてないからです。新しく入った子、このまえ2週間でやめました。でも真面目な子でした。髪も黒いし、メイクも全然してないし、優しい子でした

(保塚に) 田辺さん

チャウ  
保塚

田辺さん

盧

そう田辺さん、でも店長はそうゆう子に教ええないです。人に任せます。

保塚

何で

盧

タイプじゃないから

保塚

あっはっはっは

盧

笑い事じゃないです

チャウ

保塚さん、笑ったらダメ

保塚

あ、すいません

盧

目がこんな大きい林さんには何にも注意しないで、髪の毛も黄色です

保塚

外人？

盧

ギャルです

保塚

あゝ

チャウ

保塚さん、ギャル

保塚

はいはい

盧 林さんって言うてるのに、話聞いてよちゃんともう

保塚 ごめんなさい

盧 そうやって人で態度変えます、優しくしたり、厳しくしたり、教えなかつ

たりします、私そういう店長嫌です、もう顔も見たくないです

保塚 まあ、そう言わんで、怒られたらなにくそって思ってたやばいいじゃない

盧 保塚さん

保塚 ん

チャウ 保塚さん保塚さん

保塚 んん

二人 私たちは怒られない！

保塚 え

チャウ 私たち真面目に働いてます

保塚 あ、そう

盧 店長、私たちに優しいです、私たち元気です、文句も言わないです

チャウ ミスしても怒られない

盧 ミスしない！

チャウ 私する

盧 そうです、チャウさんはミスしますたまーにね、盧さんはしない

胡 私もしない

盧 盧さんと胡、長いですが、前の店長もその前の店長も知ってます

チャウ 保塚さん、盧さんが言うてるのは、新しい人が入ったときの話

保塚

なるほど

盧

保塚さん、話聞いてよねちゃんと

保塚

今分かりました

盧

新人の人、かわいいそうです。誰も長続きしない

保塚

なるほどねえ

保塚、ゆつくりビールを飲んだ

盧

保塚さんに聞きたいです

保塚

何を

盧

どうしたらいいですか

保塚

お、何を何を

盧

だから店長！

保塚

店長はどうすることもできんでしょう

盧

でも保塚さん、いつも言ってます、初めての人ほど親切に丁寧に教えます

保塚

うちではね

チャウ

保塚さん、先週のチャウの見ました？

保塚

まだみとらん、ごめん

チャウ

保塚さんに言われたことなおしました

保塚

見とこうね

盧

店長に言います、初めての人ほど優しく教えてくださいます

胡 盧に言われても店長分らないふりするよ  
盧 誰も言わないです、だから盧さんが言います  
胡 「みんなが盧さんぐらい仕事が出来たらねえ」  
チャウ ひひひ  
盧 最初から出来るわけないだろ、バカ

保塚、胡、チャウ、笑う

盧 笑い事じゃないです

保塚 (笑って) ごめんなさい

盧 来週はそんな怒りを作品にします

保塚 お、楽しみねえ

胡 それ見てまた笑うでしょ

保塚 ひとが生けたもんは笑わんよ

胡 私笑う

盧 店長はミス怒らないけど、笑います

保塚 気にすんなってことだよ

盧 指差して笑います「盧さん、何年目〜？」って

保塚 …それは酷いね

盧 保塚さん、ミスしても褒めてくれます

胡 「よくチャレンジしたね、そういう人は上達も早いよ」

保塚

ははは、それ僕のまね？

盧

私、頑張ろうって思います

チャウ

上達って何ですか

保塚

うまくなっっていくこと、かな

盧

保塚さんみたいに

保塚

ごめん、うまくなりたい気持ちが形になっっていくこと、かな

チャウ

形？

保塚

例えばみんながうちで作ってくれてる生け花とか。

チャウ

上手に綺麗に生けたいって思うでしょ

チャウ

はい

保塚

でもなかなか自分の思った通りにできない

チャウ

そうです

保塚

だけど失敗を恐れずにチャレンジする気持ちが、いつか作品を変えてくれる。

チャウ

はい

保塚

はは、難しいか

チャウ

いつか皆が感動する作品を生けます

保塚

うんうん

盧

分かりました、保塚さんの話をします

チャウ

盧さん

盧

いいですか、保塚さん

盧

いいですか、保塚さん

保塚

どうゆうこと？

盧

店長に保塚さんみたいになってもらいたいです

保塚

いやあ：善し悪しだよ

盧

どういう意味ですか

保塚

そうやって仕事にちゃんと気が向いてるじゃない

盧

店長が良くなったたら、もっとやる気です

保塚

あ、そう

胡

じゃあ私言うよ、新人さんに優しくしてください

チャウ

私も言います

盧

3人で言いますし、それがいいです

保塚

熱心ねえ、3人とも

盧

保塚さん

保塚

ん

盧

人が増えないと休めない！！

盧、そう叫んで、せかせかと大きな餃子を一口で食べる

保塚

明日も仕事ですか

盧

そうです、胡もチャウさんもです

保塚

大変ねえ、飲み飲み

21時をまわった。

かぞく

作 穴迫信一

【登場人物】

赤津 清太 (33) ……警察官  
赤津 勝 (60) ……清太の父、入院している  
赤津 ヒデ (58) ……清太の母  
阪原 (28) ……看護師、女性

病院の一室、勝が入院している部屋

勝はベッドに横たわり、無表情で天井を眺めている

ヒデはベッドの左手側に立ち、勝を見ているようで見ていない

清太は入り口そばに立って、髭の剃り残しを探すように顔の下半分をまんべんなくさすっている

そんな沈黙の時間があり

やがて、阪原が部屋を訪れる

阪原

失礼します

阪原、ヒデに最初に目をやり、遅れて気付くように清太に会釈した

阪原 あ、失礼します

ヒデ 主人がお世話になっております

阪原 奥様

ヒデ すいません、お任せしております  
阪原 とんでもない

勝、むくつと起き上がる

その場にいる皆、それを見る

清太 父さん

勝 デートかね

阪原 はい？

ヒデ お父さん

勝 デートの誘いかね

清太 父さん

勝 阪原さんからのデートの誘いならそりゃ断らんのやけど、ほら家内もおるし、な

阪原、笑って

阪原 赤津さん、おかしいですよ

勝 そんな照れんではない

阪原 照れる理由がないです

勝 思いは伝わっとる

阪原 着替えをお持ちしただけです

勝 着替えをお持ちして、それで、何が始まるんや

阪原 何も

勝 仕込んでんか、電話番号

阪原 もう

阪原、勝を着替えさせようとする

ヒデ あ、今日はこっちで

阪原 あ、すいません、ではお願いいたします

ヒデ いえこちらこそ、すいませんねえ、こんな、付き合わせて

阪原 いえいえ、楽しいですよ

ヒデ そうですか

阪原 では

勝 阪原さん、じゃあまた明日

阪原

また明日

勝

家族がおらんときに

阪原

ちゃんと奥様の言うことを聞いてください

勝

へへ

阪原、病室を去る

勝、それを見送り、へへへと笑って、また横になる。しかし目は瞑らず天井を見るようにして。

清太

父さん

勝

ん

清太

余計なこと、言わんでよ

勝

余計な事って

清太

看護婦さん困ったよ

勝

笑ったやろ

清太

愛想笑いよ

勝

分かるとるよ

清太

恥ずかしいけ、やめてくれ

勝

何が恥ずかしいんか

清太

いい年こいて、デートに誘いよる場合やないぞ

勝

誘ったんやない、誘いに来たんかって

清太 誘いに来んわ  
 勝 分かんやないか  
 清太 何で、看護婦さんが父さんを  
 勝 看護婦さんとか、父さんとか、そんななんないんぞ恋には  
 ヒデ 体、どうなん  
 勝 まあ、最初ほどもよおしたりは、  
 ヒデ じゃあええけど  
 勝 来週には戻るけ  
 ヒデ あんたが決めれることやないやろ  
 勝 仕事も頼まれ事も、まだまだ残つとるけ  
 ヒデ もうちよつと休んでええんよ  
 勝 これ以上休めんよ  
 ヒデ 人様に頼られるのはええことやけど、それで無理がたつとるんやない  
 清太 自分のことを考えりつて、それを言いよんよ  
 ヒデ それと、うちのことも  
 勝 分かつとるよ  
 清太 もう恥ずかしいけ、看護婦さんと話さんでいい  
 ヒデ それは別にええけど  
 清太 よくない、誰の機嫌でも取ろうとして、それで疲れるのもあるやろ

阪原、戻ってくる

阪原 失礼します

勝 おかえり

阪原 ごめんなさい何度も

勝 阪原さんはどうやら本当にワシ目当てみたいや

清太 父さんやめりつて

阪原 すいません、忘れ物

勝 ワシ？ワシ自身？

阪原 もう

清太 あきれとるぞ

阪原、着替えのかごを抱える

阪原 すいません、いつも置いていつてしまつて

勝 ノープロブレム

清太 (独り言のように) 俺は絶対こんなにならんぞ…

勝 阪原さん、ついでにトイレいいかね

ヒデ ああいいわよ、私が

清太 母さんいいよ、(阪原に) 俺が行きます

阪原 お願いします

勝 えー

清太、勝を肩に担ぎ立たせる

勝  
あたた

清太  
動くよ

勝  
はいはい

二人、ゆっくり出ていく

ヒデ  
マキちゃんよね？

阪原  
…はい

ヒデ  
覚えとる？PTAしよった

阪原  
(嬉しそうに) はい、覚えてます

ヒデ  
はは、久しぶり

二人、笑い合う

ヒデ  
そうか仕事やもんね

阪原  
いえ、声をお掛けしていいものか考えていて

ヒデ  
ああ、そんな気にせんでいいのに

阪原  
ごめんなさい

ヒデ (二人が出て行った方を顔で差して) 息子

阪原 息子さん

ヒデ 清太、警察官しよんよ

阪原 へー警察、すごい

ヒデ すごいんか知らんけどね、立派に制服とか着とるけね、あの紺の

阪原 あの重そうな

ヒデ そうそう

阪原 立派な方ですよ

ヒデ …お父さん、元氣？

阪原 はい、おかげさまで最近ちよつとずつご飯も

ヒデ ほんと

阪原 日によつてはちよつと動けない時もあるんですけど

ヒデ そうか、マキちゃんところそ長いもんね

阪原 去年一度退院して、それから一時はよかつたんですけど

ヒデ お父さんも男手ひとつやったもんね

阪原 はい、だからこれからは私が頑張る番です

ヒデ それ、あの人に話した？

阪原 …少し

ヒデ (笑って) そう、お互い頑張らなね

阪原 はい、勝さんにはいつも元氣もらってます

ヒデ (阪原を見て) うん

勝、清太、戻ってくる

勝 あら阪原ちゃんがまだおる、やっぱりワシ目当てやないか

清太 母さんと話しよっただけよ

ヒデ そうそう

清太 父さん目当てなわけないやないか

ヒデ そうよ、あんたみたいないなエロじいさん目当てなわけ

ヒデ、勝の胸をバンと叩く

ヒデ ないやろ！

勝 ゴホゴホッ！

ヒデ 案外頑丈なもんよ

勝 ゴッホ！

清太 母さん

勝、咳を飲み込んで負けじと

勝 なあ阪原さん、こんな暴力ばあさん嫌やろ

ヒデ なんてばあさんよ

勝 ワシがじいさんならお前はばあさんやろ

ヒデ どういう理屈ね

勝 二つしか変わらんのやから

ヒデ なんいよんね、ばあさんとかじいさんとかは年やないやろ、見た目やろ！

清太 おい、母さんまでやめりって、恥ずかしい

勝 見た目も十分ばあさんよ

ヒデ は、なんて？

勝 どつから見てもババアやろーが

ヒデ 言った、看護婦さん聞いた？

阪原 ふふ

勝 あ、阪原さんも笑った、思つとるけ笑うんぞ

清太 ちよつと

ヒデ あんたが適当いようけよ

清太 母さんもやめりいよ

勝 この目が見た真実よ

ヒデ 老眼でぼけぼけやろ

勝 じゃあ阪原さんに聞いてみれ

ヒデ 何で私が聞くんね、私が「私ババアに見える？」って聞くんね、そんなも

母さん「はい見えます」って言うわけないやろ！

清太 母さん！

ヒデ 阪原さんは心が優しいんやから！

清太

母さん、やめりって！

阪原

(困ったように笑顔で) もう

勝

じゃあ分かったワシが聞いちやるよ

清太

おい

ヒデ

おう聞け聞け

清太

聞かんでええって

ヒデ、病室を出ようとする

勝

おいどこ行くんか

ヒデ

外出るんよ、私がおったら私が聞くのと同じようなもんやろ

勝

おつても言ってくれるかもしれんぞ「はいババアですな」って

ヒデ

残酷すぎるわ

勝

なあ、阪原さん

ヒデ

さすがにその時は…現実受け止めるわ！

勝

がはははは

ヒデ

あははは

阪原

ふふふ

3人、バカ笑い

清太

もうええ、やめろ！

沈黙、冷えたベッドの脚がキーンと鳴った。

清太

あんたらいつつもそうや、恥ずかしいようなこと平気で言っ  
て、何考えとんか分かるんぞ。ひとのためひとのためって抱え込んで、  
そのせいで一人でトイレ行けんぐらい大事（おおごと）なっとるのに  
入院しとるときぐらい大人しくできんのか

勝

それもあるって、絶対

清太

そうなんか

清太

誰かに気使つとる場合やないんよもう

勝

ワシは別に楽しくおりたいだけよ

清太

度が過ぎとんよ

勝

阪原さんは笑ってくれたぞ

清太

長引きたいんか

勝

こっちの方が健康的よ

清太

…じゃあええ、俺は仕事に戻るけ

ヒデ

清太

清太

母さんもこんなのに付き合えよったらいけんぞ

ヒデ

あんたいつとき来れんやろ

清太　　いいよ来れんで、この調子なら

ヒデ　　そう

清太　　せいぜい長引け

清太、病室を出て行こうとするがふと止まり

清太　　あ

清太、阪原の方に向き直り

清太　　こんなしつかりした看護婦さんがおるのに失礼しました。(勝に) さっさと退院せえ

清太、阪原に礼をする

ヒデと阪原、思わず目が合い笑いそうになる

勝　　清太、人のためには自分のためぞ

清太　　…説教か

勝　　今まで色々してきたおかげで、今は皆に助けられとるんよ

清太　　…

勝　　ちよつと無理したいところがあるんよな、そういう性格やけ

清太

…それは知つとる

勝

お前だつて警官しよるんやけ似たようなもんよ、しっかり血引いとる  
じゃーん

清太

知らん

ヒデ、必死に口を閉じているが口角が上がっている

清太、怒つたような素振りで、また恥ずかしそうに、病室を出ていく  
3人、清太の去つた扉を見ながら

勝 阪原

あれ、息子なんよ  
はい

ヒデ、我慢できず、ぶっと吹き出す

ユキエとミドリ

作 塩津順子

【登場人物】

ユキエ

井筒屋に勤めている女性。二十歳。

ミドリ

井筒屋に勤めている女性。ユキエと同期。二十歳。

昭和三十六（一九六一）年七月。夜8時くらい。

井筒屋（小倉）の入口前に二人の女性（ユキエとミドリ）が、立って話をしている。

井筒屋の営業時間は終了してシャッターが閉まっている。

ミドリは、落下傘スカートと、ノースリーブブラウスで、いかにもこれから遊びに行く様子。

一方ユキエは、普通の膝丈スカートと、ブラウス。

ユキエ

私は全然迷惑とか思っていないよ？

ミドリ

ほんとに？

ユキエ

ほんとに。気にしすぎだって。

ミドリ

でも、ユキエが思っただけでも、ね。

ユキエ 気にすることないって。誰でも間違えることくらいあるって。

ミドリ 佐藤さんと加藤さんを間違えるなんて、自分でもほんととバカで。ほんと。

ユキエ 「と」と「か」なんて一文字違いでしょ。あるある。

ミドリ でも、佐藤さん、結局着物買っついていかなかったし。

ユキエ それは、値段が高いのと、色がやっぱりしっくりこないって言ってたじゃない。それだけだよ。

ミドリ そうかなあ……。うん。まあ、ありがとう。

ユキエ いやいや。

ミドリ ていうか、いつもありがとうね。フォローしてくれて。

ユキエ 私だって、いつもフォローしてもらってるし。

ミドリ いやいや、私なんて。

ユキエ 時間大丈夫？

ミドリ なんです？

ユキエ 今日、今から行くんじゃないの？

ミドリ ああ、ダンスホール？

ユキエ うん。

ミドリ まあ、行くけどねー。ユキエはまだ待ち合わせの人、来んの？

ユキエ うん、まあ、帰る直前に電話したけさ、遅くなると思う。

ミドリ そっか。

ユキエ やけ、一緒に待たんでいいよ。

ミドリ や、危ないよ。もう暗いし。

ユキエ 大丈夫って。

ミドリ それに、もともと遅れていくつもりやったし。

ユキエ なんで？

ミドリ 最近、ちよつといいなって思ってる人が、来んのよ。

ユキエ へー、どんな人？

ミドリ なんか、静かな人。

ユキエ 静か。

ミドリ うん。みんながワイワイ騒いどる輪から外れて、一人で飲んどる人。

ユキエ 話したことある？その人と。

ミドリ うん、一度だけ。

ユキエ どうやった？

ミドリ 私が一方的に喋ってばかりやったけど、なんか素敵やったんよねー。

二人で抜けませんかかって誘われるの待ったんやけどさ、中々言ってくれんでき。

ユキエ うんうん

ミドリ そんなで、私から誘おうかと思ったら、飲み物取りにいつて、ずっと他の人

と喋った。

ユキエ あー。

ミドリ これ、脈なかつたんやろうな。

ユキエ また、きつと来るよ。

ミドリ そうかなー。

ユキエ

そうよ。もしかしたら、今日は早く来とるかもしれんよ。

ミドリ

行ったほうがいいんやない？

ユキエ

え、なんでわかるの。

ミドリ

いや、勘だけ。

ユキエ

あはは、テキトーやん。

ミドリ

まあ、でも、いつ来るかわからんなら、早めに行ったほうがいいよ。

ユキエ

うん。あ、でも。

ミドリ

うん。

ユキエ

あんまり早くに行きたくない理由が実はもう一個あつて。

ミドリ

えつなになに？

ユキエ

最近ずつとおる男の人がちよつと苦手っていうか。

ミドリ

へーどんな人？

ユキエ

なんか、めっちゃ喋りかけてくるんだけど、ずれてるっていうか。

ミドリ

うん。

ユキエ

なんか、自分では喋りが上手い気ではいるけど、全然そんなことないんだよ

ミドリ

ね・・・。

ユキエ

あー！いるいる、そういう人。

ミドリ

まわりの子も迷惑しとるんよね。ほんとあいつ来んでほしいわー。

ユキエ

どんなこと言ってくるん？

ミドリ

いろいろあるけど、一番うわって思ったのは、わざわざクイズみたいに言ってきたときかな。

ユキエ

へー。

ミドリ

「何飲んでるんですか？」って聞いたたら、「さあ、なんでしょう」とかいつてきてさ。その時点でちよつとめんどうくさくて。

ユキエ

うんうん。

ミドリ

「ビールですか？」って答えたら、「おいしい、サッポロビールでしたー」って言ってきて。

ユキエ

当たつとるやん。

ミドリ

だよね。小さいよね。

ユキエ

私ならどついとるかもしれん。

ミドリ

そのあと、サッポロとキリンの違いをベラベラ語ろうとしてきただけ、ちよつと踊りに行ってきますって言って、あとはひたすら踊った。

ユキエ

あはは、バーじゃなくてよかったね。

ミドリ

バーやったら、トイレって言って逃げたね。

ユキエ

その人は踊らんの？

ミドリ

それが踊るんよ。

ユキエ

へー。見てみたい。

ミドリ

まあ、ダンスは普通よ。あ、でも、もう少し、離れて踊って欲しいかな

ユキエ

なんで？

ミドリ

こう、ここまでは近づいてもいいけど、ここまで来ると無理って距離、あるじゃん。

ユキエ

わかるわかる。お客さんでも、なんか近い人って、いるよね。

ミドリ　そう。踊る時、なんか近いんよ。

ユキエ　そっか・・・残念だね。

ミドリ　ね、会いたくないでしょ、その人。

ユキエ　でも、一回は会ってみたいかも。

ミドリ　じゃあ、ユキエもダンスホール、行こうよ！

ユキエ　え、無理無理。だって、迎え来るんだし。

ミドリ　だから、迎えの彼氏にも言つて、三人でダンスホール行くんよ。

ユキエ　彼氏？え、三人？

ミドリ　私とユキエと、ユキエの彼氏。

ユキエ　いやいやいや。今から来るのは、彼氏やないから。

ミドリ　うそやん。

ユキエ　ほんとに。

ミドリ　じゃあ誰なん？

ユキエ　まあ、誰でもいいやん。

ミドリ　怪しい。

ユキエ　ミドリが思つとるような人やないよ。

ミドリ　どういふことよ。

ユキエ　彼氏とか、そういうのやないよ。

ミドリ　えー・・・わからん。

ユキエ　わからんでもいいよ。

ミドリ　もしかして、お父さんとか？

ユキエ

えっ。

ミドリ

え、ほんとにお父さん？

ユキエ

いやいや、違うよ！そんなわけないやん。

ミドリ

そうよねー。

ユキエ

私人家、黒崎やし、遠いし。

ミドリ

じゃあ、誰が来ると？

ユキエ

わかった、ほんとのこと言うよ。

ミドリ

おっ。

ユキエ

・・・彼氏です。

ミドリ

ほんとにー!?

ユキエ

そうよ。

ミドリ

え、いつからいつから？

ユキエ

まあ、1ヶ月前、くらいかな。

ミドリ

けっこう最近やねー。てか言つてよー。

ユキエ

いや、なんか、言う機会なくてさ。

ミドリ

かっこいい？

ユキエ

そうやね、裕次郎っぽいかな。

ミドリ

えー！めっちゃかっこいいやん。

ユキエ

いや、言いすぎたね。眉毛がね、ちよつと似てる。

ミドリ

眉毛とか、濃い人いっぱいおるやん。

ユキエ

あ、そうよね。

ミドリ 眉毛以外は誰似？

ユキエ 眉毛以外は、・・そうやね、柴犬っぽいかな。

ミドリ なんそれ！

ユキエ 私あんまりテレビみらんけわからんちゃね。

ミドリ せめて人に例えてよ。

ユキエ あはは、そうよね。

ミドリ あっ。

ユキエ なん？

ミドリ その人って、もしかして耳たぶにほくろある？

ユキエ え、どうやろ。あつたような、なかつたような。

ミドリ 私、その人知つとるかもしれん。

ユキエ うっそ。

ミドリ いや、でもまさかね。

ユキエ 言つてよ。

ミドリ クイズの人よ。

ユキエ え。

ミドリ さつき話した変なやつよ。その人、眉毛濃いし、顔が柴犬っぽいもん。

ユキエ 違うって絶対。彼、ダンスホールとか行かんもん。

ミドリ そりゃ彼女にダンスホール行つてるとか言えるわけないやん。

ユキエ いやいや行かんって。それにそんなしつこい性格やないもん。

ミドリ じゃあ、ユキエを口説くとき、どんな感じやったん？

ユキエ  
それは・・・。

ユキエ、少し考える。

ユキエ  
彼と初めて会ったのは、行きつけのバーだった。

ミドリ  
え、どこのバー？

ユキエ  
砂津の方かな。

ミドリ  
なんて名前の店？

ユキエ  
えっと、たしか永遠の地中海みたいなそんな名前やったよ。

ミドリ  
洒落た感じやね。

ユキエ  
そう、店内も、薄暗いけど、ジャズとか流れててね。

ミドリ  
へー。

ユキエ  
で、一人でカクテル飲んだの。

ミドリ  
ユキエお酒弱いのに？

ユキエ  
私だって飲みたくなる日もあるわ。

ミドリ  
そうなんだ。

ユキエ  
そんな時、隣に座ってきたのは彼だったわ。

ミドリ  
えー！なんて言って座ってきたの。

ユキエ  
そりゃ、普通よ。「隣いいですか？」って。

ミドリ  
で、そこから口説かれるの？

ユキエ  
いや、そこはまだ普通よ。彼はとりあえずウイスキーを頼んだ。

ミドリ ロック？

ユキエ うん、ロックだったと思う。

ミドリ いつ話しかけるの？

ユキエ それから、「乾杯」って私にグラスを向けてきたかな。

ミドリ え、彼もう酔っ払ってんの？

ユキエ あ、ちがうちがう。「お仕事帰りですか」って声かけてきたんよ。

ミドリ なんかうろ覚えやね。

ユキエ 私もその時酔っ払ったからね。

ミドリ それで？

ユキエ ま、いろいろお話したんよ。仕事の話とか、趣味の話とか。

ミドリ うんうん。

ユキエ で、「また、いろいろお話したいのですが」って言われて、名刺を渡され

たんよ。

ミドリ それから、会うようになったんやね？

ユキエ そうそう。

ミドリ えー、でも、それだけじゃユキエの彼があいつかわからんやん。

ユキエ でも、絶対その人じゃないから。私の彼は。

ミドリ じゃあ、その人どんな格好すると？

ユキエ えーと、そうやね。まあ、ラフな格好が好きかな？

ミドリ あ、じゃあやっぱりあいつかもしれない！

ユキエ え、なんで？

ミドリ  
ユキエ  
ミドリ  
ユキエ

あいつよく半ズボンとか履いてくるけん。

あ、じゃあ違う。彼、ズボンは絶対長い派だから。

そんなこだわりあるんや。

そうよ。紳士なんよ。

紳士かはわからんけど。

ね、彼はそのクイズの人やないやろ？

でも、なんか怪しいよ。

そんな疑わんでよ。

ユキエはその人とおって、イラツとすることない？

全然ないよ。

それはそれで怪しいんやけど。

とにかく、その人やないよ。

やっぱ見てみらんとわからんよ。

もういいって。

わかった。じゃあ、あと五分経ったら、行く。

いやもう行ってもいいんだって。

そんなに、私とおりにたくないん？

いや、そういうわけやないけどさ。

じゃあおる。

もう。

五分経つても、迎えに来んやったら、私は知らんまんま潔く立ち去るよ。

五分内にユキエの彼氏がきたら、私は彼氏を見て、今日はぐっすり眠れるよ。

ユキエ

大げさやね。

ミドリ

賭けみたいなものよ。

ユキエ

もう三十秒は経ったね。

ミドリ

数えるの早いよ。

ユキエ

この時計で、四十分になったら行くんやけ。

ミドリ

ユキエが決めると？

ユキエ

いいやろ。

ミドリ

まあいいけど。あー、どうか、早く来ててください。

ユキエ

来て欲しくないなあ。

ミドリ

五分は短かったかな。

ユキエ

長いよ。

## コーラの樽

作 塩津順子

### 【登場人物】

研二 二十二歳。

伊佐子 二十一歳。

昭和三十七（1962）年。

和室に男（研二）が正座している。

研二の周りには、剣山、新聞紙、ハサミ、スカシユリ、小菊がある。

剣山には1本の黄色いスカシユリが刺さっている。

研二は、次の花を、どこに置こうか迷っている。

襖を隔てて縁側に座っている女（伊佐子）はコーラの瓶を持っている。

伊佐子、コーラを飲む。

伊佐子 おいしいー。

研二 おい。

伊佐子 なん？

研二 なんやないちゃ。静かにし。

伊佐子 だって、おいしいんやもん。

研二　なん飲んどるん？

伊佐子　コーラよ。コーラ。

研二　コーラ？

伊佐子　知らんの？

研二　いや、知つとるけど。どうしたん？

伊佐子　お母さんが持たしてくれた。

研二　へえ、いいなあ。

伊佐子　やけ一緒に飲もうよ。

研二　生け花が終わったらな。

伊佐子　さつきから全然終わつたらんやん。

研二　伊佐子が話しかけてくるけやろ。

伊佐子　いいやん、別に喋ったって。

研二　集中できんのよ。

伊佐子　喋りながらも、どんどんお花をさしていったらいいやん。

研二　わかつたらんね。

伊佐子　そう？喋ってやっても、黙ってやっても、いいものはいいし、だめなもの

はだめやろ？

研二　俺は喋りながらだと、どうしてもダメなタイプなんよ。

伊佐子　そうなん？

研二　俺の先生も、一発勝負でどんどん挿して行って、見事に決めるんよ。

俺はそれを目指しとる。

伊佐子 へー。私は逆に黙って作業するの、無理やな。

研二 そうやろうね。

伊佐子 縫い物するときも、喋ってないとダメ。

研二 伊佐子は喋りながらも、針に糸通せるもんな。

伊佐子 うん。

研二 でも、俺は二つのことは一緒にできんけ、ちよっとそっとしといて。

伊佐子 わかった。

研二 おう。

伊佐子 一人で飲んどくけ。

研二、小菊を手に取り、悩んでいる。

伊佐子、またコーラを一口飲む。

伊佐子 つはあー。

研二 ・・・。

伊佐子 あっごめんね。

研二 ・・・。

伊佐子 でも今のはセーフやる？息を吐いただけやけ。

研二 気が散るんやけど。

伊佐子 そっか。ごめんわかった、静かにするけ。

研二 ならいいけど。

伊佐子

うん。

伊佐子、コーラをごくごく飲む。

研二、コーラが気になっている。

研二

なんか、シユワーって聞こえるんやけど。

伊佐子

ほんとに？すごいねケンちゃん。

研二

いや、やっぱり意識がどうしてもそっちにいつてしまう。

伊佐子

それは私にはどうもできんよ。

研二

「コーラは炭酸が入つとるん？」

伊佐子

うん、入つとるよ。

研二

それはおいしそやな。

伊佐子

ケンちゃん、コーラ飲んだことないん？

研二

ないよ。

伊佐子

そうなんや。

研二

俺は遅れとるんやな。

伊佐子

そんなことないよ。私も飲んだのは最近やし。

研二

いや、でも、とにかく俺はこれを終わらせんと。

伊佐子

今どなんなつとるん？

伊佐子、襖を開けようとする。

研二 おい、まだだめやけ。  
伊佐子 ちよつとくらいいいやん。  
研二 見たら、伊佐子、いろいろ言うやろ。  
伊佐子 そりゃ感想くらい言うよ。  
研二 完成して言ってくれ。  
伊佐子 はいはい

伊佐子、襖を微妙に小さく開ける。

研二 開けたやろ。  
伊佐子 ばれた？  
研二 バレバレや。

伊佐子、襖の隙間から、コーラの瓶を見せる。

伊佐子 見てみて、これがコーラ。  
研二 おお、ポスターで見たことある。  
伊佐子 一緒に、飲もうよ。

研二、立ち上がって襖を開ける。

研二 わかった。  
伊佐子 はい。

研二、コーラを受け取って、ごくごくと飲む。

伊佐子 おいしい？  
研二 ……薬みたいやな。

そう言って、研二はコーラを飲み干す、

研二 あー、カーっとする。  
伊佐子 そうやろ、そういうのが斬新なんよ。  
研二 ラムネと一緒やろ。  
伊佐子 ねえ、瓶貸して。  
研二 おう。

伊佐子、部屋に入りこむ。  
研二、伊佐子に瓶を渡す。

伊佐子 ほら、こうしたら、もっと斬新よ。

コーラの瓶に、スカシユリを差し込む。  
一輪挿しができあがる。

研二

斬新やね。

天井

作 守田慎之介

【登場人物】

父 32歳

リツ子 7歳

昭和16年。八幡市にある家。

てぬぐいをマスク替わりにした父が背の高い棒を持ち、家に入って来る。

父 えい。

父、棒で天井を突く。

天井板がミシミシと音を立てる。

父 えい。えい。

父、棒で天井を突く。

天井板がバラバラと降って来る。

父  
えい。えい。

と、外から声が聞こえる。

リツ子（声） お母さん！さっちゃんのおいちゃんが、

リツ子が入ってくる。

リツ子  
ちよ、え？

父  
おお、おかえり。

リツ子  
え、お父さんも？え？

父  
ほら、あっち行ってなさい。

リツ子  
いや。

父  
危ないけ。天井の板が落ちて来るけ。えい。

父、棒で天井を突く。

天井板がバラバラと降って来る。

父  
ほら。

リツ子  
何しよん？

父  
ん？

リツ子  
それ。

父  
見て分かん？

リツ子  
分かるけど、いや、分かんけど。

父  
分かん？天井を壊しよんよ。えい。

父、棒で天井を突く。

天井板がミシミシと音を立てる。

リツ子  
えい、やなくて。

父  
危ないけ、のいとき。

リツ子  
何でそんなしよん。

父  
だって、お父さん仕事忙しいやろ？

リツ子  
うん。

父  
だけ、久しぶりの休みやけ、今日やっとかんと。えい。

父、棒で天井を突く。

天井板がバラバラと降って来る。

リツ子  
いや、そうやなくて。

父  
何かいっちゃ。

リツ子 何で天井を壊しよるかつちこと。

父 何で？

リツ子 何で。

父 爆弾が降って来るけやる。

リツ子 爆弾？

父 そうよ。爆弾。焼夷弾。

リツ子 ああ。

父 爆弾が降って来て、天井板のところで引つかかったら、の？火事になるやろ？

リツ子 うん。

父 火事、嫌やろ？

リツ子 火事、嫌。

父 だけ、壊しよんよ。

リツ子 ああ。

父 えい。

父、棒で天井を突く。

天井板がバラバラと降って来る。

リツ子 いや、え、爆弾が降って来るん？

父 降らんよ。

リツ子 うん。

父 そんな大変なことにはならんよ。

リツ子 うん。

父 大丈夫。

リツ子 なら。

父 降らんけど、もし降ったらつちことやろ？

リツ子 降らんのやったら、そんなんせんでいいやん。

父 じゃあ、降ったらどうするんか。

リツ子 降るん？

父 降らんよ。

リツ子 え？え？

父 もし降ったらよ。可能性。どうする？

リツ子 大変なことになるけど。

父 そうやろ？

リツ子 でも、降らんのやろ？

父 降らんよ。

リツ子 やったら。

父 降ったらつち。可能性がっち言いようやろ。

リツ子 ・・・うん。

父 降らんけど、降った時の事を考えとくつち言う、賢い考えやろ。

リツ子 ・・・。

父 転ばぬ先の杖よ。分かる？

リツ子 分かるよ。

父 の？ 転ぶ前に杖を準備しとくつちいう。

リツ子 分かるけど。

父 言わば、爆弾が降る前の天井よ。

リツ子 ・・・うん。

父 火事になるんやけ。

リツ子 ・・・うん。

父 はあ、もう。えい。

父、棒で天井を突く。

天井板がバラバラと降って来る。

リツ子 雨降ったらどうするん。

父 あ？

リツ子 天井なくて、雨降ったら。

父 お前は馬鹿か。屋根があるうも、屋根が。

リツ子 屋根？

父 屋根よ。瓦の乗った立派なんがあるうが。

リツ子 屋根は残すん？

父 当たり前やろうが。屋根がなかったら、雨降って、どうするんか。

リツ子 濡れる。

父 だけ、濡れんように屋根は残すんやろうが。  
リツ子 ああ。  
父 屋根が守ってくれるけ。  
リツ子 屋根が。  
父 えい。

父、棒で天井を突く。  
天井板がバラバラと降って来る。

リツ子 目が痛い。  
父 埃が落ちて来るけ。外行つとき。  
リツ子 ねえ。  
父 あ？  
リツ子 屋根が守ってくれるならさ、  
父 うん。  
リツ子 お父さんは何しよん？  
父 え？  
リツ子 今。  
父 何回言わせるんか。天井を壊しよんやろうが。  
リツ子 いや、屋根が守ってくれるんやろ？  
父 は？

リツ子 だけ、爆弾が落ちて来ても、屋根が守ってくれるならさ、  
父 守ってくれんよ。  
リツ子 ん？  
父 屋根は爆弾から守ってくれん。  
リツ子 そうなん？  
父 屋根が守ってくれるのは、雨ぐらいよ。  
リツ子 雨ぐらい。  
父 爆弾とか、守れるわけなからうが。  
リツ子 え？あんな固いんに？  
父 固くない、固くない。  
リツ子 いや、固いちゃ。私が乗っても壊れんもん。  
父 お前から見たら固いかも知れんけど、爆弾から見たら全然よ。  
リツ子 全然なん？  
父 俺が何の仕事しようか知らんか？  
リツ子 製鉄。  
父 そう、製鉄よ。だけ、それぐらい知つとるんちゃ。  
リツ子 え、じゃあ、屋根を突き破るつちこと？  
父 そうよ。  
リツ子 そんな固いん？  
父 固い。もう屋根とか目じゃないくらい固い。  
リツ子 そしたら、この天井も突き破るんやないん？

父  
突き破るよ。えい。

父、棒で天井を突く。

天井板がバラバラと降って来る。

父  
それぐらい重たいもん。爆弾。

リツ子  
え？なら、お父さんは今、何しよん。

父  
お前のお。

リツ子  
爆弾にさせればいいやん。それ。

父  
だけ、可能性やろうが。こう、屋根を突き破って、天井にひっかかるかも  
知れんちゆう、可能性。

リツ子  
ひっかからんかったら、何のいいことがあるん？

父  
火事にならんですむんよ。えい。

父、棒で天井を突く。

天井板がバラバラと降って来る。

父  
ほら、梁が丸見えになってきた。

リツ子  
でも、そしたら、ここ（床）に落ちて来るやろ？

父  
ん？

リツ子  
爆弾。

父　　そらそうやる。ひっかからんのやけ。

リツ子　火事になるやん。畳が焼けて。

父　　お前、冷静に考えろよ？

リツ子　冷静に……。

父　　ここ（床）で火事になったら、手が届くやる？

リツ子　熱いけど。

父　　熱いよ。火が出とんやけ。

リツ子　うん。

父　　でも、ここなら、こうバンバンつちすることもできるし、外のバケツで水

も掛れる。

リツ子　まあ。

父　　それが天井やったら、どうなる？

リツ子が上を眺める。

父　　やろうが。手も届かんかったら、水も掛けれん。

リツ子　そうやね。

父　　火はみるみる大きくなって、大火事になるやる？

リツ子　なる。

父　　そしたら、町中に火が広がって。の？

リツ子　うん。

父 だけ、それを防ぐためにやりよんよ。賢いやろ？  
リツ子 賢い・・・。  
父 分かったか？  
リツ子 分かったような。  
父 えい。

父、棒で天井を突く。  
天井板がバラバラと降って来る。

リツ子 直撃したら？  
父 え？  
リツ子 爆弾が、うちに。  
父 せんよ。  
リツ子 何で言い切れるん。  
父 せん。  
リツ子 可能性やろ。  
父 そもそも爆弾は降らんし、もし降ったとしてもうちには落ちんし、万が一落ちたとしてもそこに俺たちはおらん。  
リツ子 可能性はあるやろ。  
父 ない。  
リツ子 あるちゃ。

父 あったとしても、なら天井板があっても、そんな変わらん。  
リツ子 じゃあ、お父さんは今、  
父 えい。

父、棒で天井を突く。

天井板がバラバラと降って来る。

二人は上を眺める。

父 見晴らしがよくなったわ。

リツ子 そう？

父 よくなったよ。

リツ子 こうやって見たら、もろそうやね。

父 ン？

リツ子 (上を指し) あれ。

父 そうやな。

リツ子 外から見たら立派なんにね。

父 こっから見るもんやないけな。

リツ子 守れそうにない。

父 雨ぐらいからは守ってくれるよ。

リツ子 雨漏りしそう。

父 雨漏りはするかもな。

リツ子 雨は絶対降るもんね。

父 雨は絶対降るやろな。

リツ子 爆弾は？

父 爆弾は降らんよ。

隣の家から天井板が落ちる音が聞こえる。

父 みんなやつとるな。

リツ子 爆弾が降る前の天井。

父 ん？

リツ子 お父さんが言ったやん。転ばぬ先の杖っち。

父 ああ。賢いやろ？

リツ子 そう思う？

父 お前はどよう思う？

リツ子 爆弾が降る前に、爆弾が降らんようにすればいいと思う。

父 賢いな。えい。

父、棒で天井を突く。

天井板がバラバラと降って来る。

## 踏切のそばの小屋

作 守田慎之介

### 【登場人物】

友彦 12歳

羽場（踏切番のおじさん） 58歳

昭和32年、冬。門司にある踏切そばの小屋。

羽場がウイスキーのボトルを持って、隣の部屋から出てくる。

部屋に入ってきたと、一度時計を確認する。

羽場 　　ん。

ウイスキーをコップに注ぎ、口をつける。

と、小屋をノックする音がする。

羽場 　　馬鹿、馬鹿、馬鹿、

羽場は慌てて、ウイスキーのボトルとコップを隣の部屋に隠す。

再び、小屋をノックする音。

羽場

はいはいはい。はい。

羽場はドアを開ける。

と、そこに立っているのは友彦。

友彦

こんちや。

羽場

なんだ。

友彦

なんだ？

羽場

また、お前かちや。

友彦

またつち何なん。

羽場

また、やろうが。

友彦

久しぶりやん。

羽場

こないだ来たやないか。

友彦はストーブの前に行き、

羽場

こら・・・友彦！

友彦

はー、あつたけえ。

羽場

勝手に入んな。







羽場　　　　　そういうんがガキなんよ。  
友彦　　　　　ガキやないちゃ。  
羽場　　　　　はいはい、お母さんが待つとるけ、早く帰んなさい。  
友彦　　　　　ちよつと。  
羽場　　　　　帰れ。  
友彦　　　　　何で、そんな追い出したがるん？  
羽場　　　　　え？  
友彦　　　　　俺がおつたら、何か困るん？  
羽場　　　　　困るわ。  
友彦　　　　　何で？  
羽場　　　　　馬鹿。仕事中やけよ。  
友彦　　　　　だって、いつもはそんなやないやん。  
羽場　　　　　甘い顔しとると、つけあがるやろうが。  
友彦　　　　　そんなことないし。  
羽場　　　　　そういうのが、つけあがつとるつち言うんよ。  
友彦　　　　　あがつてない、あがつてない。  
羽場　　　　　ほら、帰れちゃ。忙しいんやけ。  
友彦　　　　　それは絶対ウソやん。  
羽場　　　　　ウソやねえちゃ。  
友彦　　　　　忙しそうなどこ、見たことないし。  
羽場　　　　　お前が見てないだけで、忙しいんよ。

友彦

何が忙しいん？

羽場

だけ、書類の整理とか。

友彦

書類？

羽場

いいちゃ。忙しいんやけ、帰れ。

友彦

なら、手伝っちゃるけ。

羽場

大丈夫。

友彦

忙しいんやろ？

羽場

忙しいけど、自分で何とかするちゃ。

友彦

ご近所のよしみで。

羽場

踏切したいだけやろ。

友彦

こんなに言ってもダメ？

羽場

ダメつち言いようやろうが。

友彦

俺、もうすぐ誕生日なんよ。

羽場

え？

友彦

誕生日。

羽場

誕生日？

友彦

12歳になるん。

羽場

・・・。

友彦

だけ、そのお祝いと思って、ね。

羽場

お祝い。

友彦

一回だけ。

羽場

馬鹿。

羽場は友彦の頭を小突く。

羽場

お前は夏生まれやろうが。

友彦

ん？

羽場

知らんと思ったか。

友彦

知ったった？

羽場

お前が生まれた時から知つとるわ。

友彦

知つとったか。

羽場

ほら、帰れ、うそつき。

友彦

じゃあ、そんな時のお祝いということ。

羽場

何ヶ月前の話か。

友彦

それのお祝いで。

羽場

よその子を祝うほど余裕はないわ。

友彦

だけ、踏切させてくれるだけでいいんやけ。

羽場

踏切はさせせん。それで、忙しいんやけ、さっさと帰れ。

友彦

・・・。

羽場

そんなにやりたいなら、の？

友彦

ん？

羽場

将来、国鉄に入って、踏切番になればいい。



羽場

それが嫌なら、帰れ。

友彦

じゃあ、掃除する。

羽場

え？

友彦

掃除して、ここで待つとく。

羽場

いや、ちよつと。

友彦

掃除するなら、おつていいんやろ？

羽場

帰れつちことなんやけど。

友彦

掃除道具はどこにあるん？

羽場

奥の部屋。

友彦

ん。

友彦が隣の部屋に入って行く。  
と、

羽場

あ、ちよ、待て。

羽場が慌てて、隣の部屋に入って行く。

友彦

あ。

羽場

ああ。

友彦

・・・くさ。

羽場  
友彦  
羽場

臭くないちや。  
酒くさ。  
臭くはない。

友彦が隣の部屋から出て来る。  
その後ろから、掃除道具を持った羽場が出て来る。

友彦  
羽場  
友彦  
羽場

なるほどね。  
なんが。  
だけ、帰って欲しかったんやね。  
別にそういうことやないちや。  
いや、そうやろ。  
今日はホントに忙しくて。  
お酒飲むのが。  
違うちや。色々あつて。掃除もせないけんし。  
うん。  
今日は掃除当番やけ。  
俺、手伝うよ。  
いいちや。  
いいん？  
だけ、その気分転換っち言うか。そういう。

友彦

仕事中なんに。

羽場

まあ、そうやけどの。

友彦

大人は規則を守るんやなかったん？

羽場

守るよ。

友彦

ほお。

羽場

掃除当番やけ、掃除する。

友彦

うん。

羽場

何か。脅すんか。

友彦

脅してない、脅してない。

羽場

脅しよるやないか。

友彦

俺、大人やけ、内緒にしきるよ。

羽場

は？

友彦

誰にも言わん。

羽場

．．．  
踏切やらせてくれても、誰にも言わん。

友彦

それを脅しつち言うんよ。

羽場

外はもう暗いし。

友彦

暗いよ。

羽場

寒いけ上着着るし、ヘルメットもつける。

羽場

だけ何か。



羽場 ちゃんと被れよ。バレるけ。  
友彦 了解。

ヘルメットを渡す。

羽場 何でこうなるんかちゃ。

友彦 お酒飲みよつてもいいよ。

羽場 飲まんわ。

友彦 旗は？

羽場 馬鹿。これは俺がするわ。

友彦 まあいいや。降ろせるなら。

小屋の外に出て行く。

羽場は窓から顔を出し、

羽場 いいぞ。下ろせ。

友彦はハンドルを回し、踏切を降ろしている。

羽場は窓から手を出し、向こうに白い旗を振る。

汽車が通り過ぎる。汽車を見ている二人。

友彦は踏切を開け、小屋に戻って来る。

友彦  
羽場  
友彦  
羽場  
友彦  
羽場  
友彦

おもしれえ。  
仕事よ、俺の。  
俺も踏切番になろうかな。  
ならんっち言いよったやねえか。  
悩むわ。  
好きにしろ。  
みんなの安全を守る。

友彦がヘルメットを脱ぎ、羽場に渡す。

羽場  
友彦  
羽場  
友彦  
羽場  
友彦  
羽場  
友彦  
羽場  
友彦

守れるのは、踏切の中だけやけどな。  
ん？  
結局は、安全は自分で守らな。  
まあ、そうね。  
掃除も手伝うか？  
掃除は、あ、さっきの車で父ちゃん帰って来るわ。  
勝手やの。  
ちゃんと内緒にしとくけ。  
あの親父の息子やからな。  
大丈夫、大丈夫。

羽場  
友彦  
羽場  
友彦  
羽場  
友彦

気をつけて帰れよ。

また手伝いに来ちやるわ。

もう来んでいいわ。

あんま飲み過ぎんようにね。

うるせえ。

じゃあね。

友彦が小屋を出て行く。

羽場は隣の部屋からウイスキーの入ったコップを持って来る。

薄汚れたいすに座り、窓から外を眺めながら、コップに口をつける。

あがる

脇内圭介

【登場人物】

柿原ヨネコ (19)

栗屋トシキ (31)

昭和36年、夏の夜、若松の高塔山に登るヨネコとトシキ。  
足元が暗い山道を、ヨネコが先に歩き、トシキがその後ろを追って  
いる。

二人の間には少し距離がある。

トシキ 大丈夫か？

ヨネコ 全く平気です

トシキ そうか

ヨネコ そこ、ぬかるんです

トシキ おお？

ヨネコ そこ、そこ

トシキ ん、お、ここか

ヨネコ 違います、そっちです

トシキ え、こっち？

ヨネコ あっちです

トシキ 右？

ヨネコ (トシキの方を向き) 右です

トシキ よし

トシキ、右側に行き、滑って転ぶ。

トシキ うわ！

ヨネコ ええ！

トシキ あいててて

ヨネコ 大丈夫ですか？だから右にあるって

トシキ いや、ヨネちゃんがこっち見て右っちいうけ、こっちやと

ヨネコ こう、歩いてるんですから、右は右ですよ

トシキ いやね、ヨネちゃんが俺の方向いたら、俺の右側はヨネちゃんにとって左側になるわけやろ？やけ、ヨネちゃんが右って言うんやったら、俺にとつては左がぬかるんだるってなるやん

ヨネコ

まあこう見たら左が右ですから、右ですって言ったたら左なんでしょうけど、そこは粟屋さんに合わせて右って言うじゃないですか、私から見ても左でも、それは親切心といいますが、そんなのでもなく、こう、進行方向に対して、右、左ってことで思っていただけだったらよかったです

でもこっち向くけ

トシキ

それはちゃんとして来ているかなと

ヨネコ

こつちを向いてしまつたら、やつぱり、それは一時的にヨネちゃんにとつて右は左になつてくるんやから

ヨネコ

しつこい

トシキ

ええ？

ヨネコ

いえ、なんでも、登りましょう

トシキ

今、なんて？

ヨネコ

ほら暗いですから足元ちゃんと見て下さい

二人、上りだす。

トシキ

何か言った？

ヨネコ

はい、ハンサム、と

トシキ

まあね、あー泥が付いてしもーた

ヨネコ

病室でも「足が長かったら俳優になつたのにね」ってみんなが

トシキ

足はね、どうしようもないな

ヨネコ 私のベッドの隣にアサミちゃんついでいたでしょ

トシキ メガネの

ヨネコ そうですメガネの

トシキ うん

ヨネコ アサミちゃん、栗屋さんのこと毎日聞くんですよ、私に  
トシキ ばれた？

ヨネコ 今じゃ病院中が知ってます

トシキ はー来週薬貰い行かないけんのかなー

ヨネコ 栗屋さんがわかりやすいんです

トシキ で、なんて

ヨネコ 何処に住んでるの？お父様もハンサムなの？って根掘り歯掘り

トシキ 俺が退院したんで淋しいのかね

ヨネコ そうでしょうね、色男

トシキ もつと言って

ヨネコ 調子に乗らない

トシキ ははは

ヨネコ こっちはハラハラしてんですよ

トシキ そうなの？

ヨネコ この人は

ヨネコ、少し歩くペースが上がる。

トシキ

ちよつと、足取り速いよ

ヨネコ

手が早い人に言われたかないです

トシキ

おお

ヨネコ

看護婦さんにちよつかいかけてたりしてないでしょうね？

トシキ

してないよ、不細工しかいないもん

ヨネコ

失礼ね。でもそれがどうして私なんかと

トシキ

ヨネちゃん、綺麗じゃないの

ヨネコ

馬鹿にして

トシキ

また速くなつとる

ヨネコ

やだよだ

トシキ

でもよかつた、それだけ速く歩けるんなら

ヨネコ

来週退院します

トシキ

おお決まつたんかね

ヨネコ

見ての通りですから

トシキ

いやー医学の進歩はすごいね、ちよつと前まで不治の病やったのに

ヨネコ

別の病棟には移りましたけどね

トシキ

そつちの病棟つち、電気点いてないってほんとか？

ヨネコ

そんなわけないでしょ、夜もちゃんと点いてたでしょ、そつちの病室から

も見えてたでしょ

トシキ

ああ

ヨネコ

そんな暗い印象ありますか

トシキ

まあ

ヨネコ

むしろ明るいくらいですよ、壁も全部真っ白で清潔だし、お昼間なんて相

トシキ

部屋の子達とキャキャ話してますから

ヨネコ

テーブルになつたととは思えんね

トシキ

私は比較的軽い方でしたから

ヨネコ

あれ、覚えとるか？

トシキ

何ですか？

ヨネコ

病室から、鏡でこう、ピカピカって

トシキ

合図するやつでしょ

ヨネコ

ああいうのね、英語でね、ロマンチックって言うんよ

トシキ

なんですかそれは

ヨネコ

ドキドキしたやろ

トシキ

あれね、同じ病室の子がからかってきたんですから。今じゃ外出許可もら

ヨネコ

いに行くたびに「栗屋さんですか？」って看護婦さんにまで言われるんで

トシキ

すよ

ヨネコ

「そうですね、愛する栗屋のもとへ」

トシキ

え？

トシキ

え？言ってるの？

ヨネコ、また歩くペースが上がる。

トシキ いやーごめんごめん

ヨネコ 大変なんですからね、いつも呼び出してばかりで

トシキ そんなズンドコズンドコ

ヨネコ 男でしょ

トシキ そう言われても、初めて登るんやけ

ヨネコ 男らしいんだか男らしくないんだか

トシキ いやいや俺が何人の女たちと

ヨネコ なんですって？

トシキ いや、今は君だけだから

ヨネコ 知らない！

トシキ ほんとほんと！

トシキ、ヨネコ、登るペースがかなり上がる。

トシキとヨネコの間隔はどんどん開いていく。

トシキ ちよつと、おおつと、ヨネちゃん、ヨネちゃん

ヨネコ はあ、はあ

トシキ すまん、すまんかった、ちよつと、止まってくれ

ヨネコ、立ち止まる。

トシキ、ヨネコのすぐ近くまで来る。

トシキ  
もう降参

ヨネコ  
・・・もうすぐ頂上です、ゆつくり行きましょう

トシキ  
一応まだ病人なんだから、無理せんでくれよ

ヨネコ  
どうも

トシキ  
そこの、切り株に座らんか？

ヨネコ  
その切り株、私専用の切り株です

トシキ  
専用？

ヨネコ  
小さいときはその切り株の上に立って、歌なんか歌ってました

トシキ  
お立ち台か

ヨネコ  
そうです、よし

ヨネコ、切り株の上に立つ。

その瞬間、何かを踏み、飛び降りる。

ヨネコ  
やあ！

トシキ  
どうした！

ヨネコ  
なんか、ふにゅって！

トシキ 虫？

ヨネコ 靴の裏に、まだ何か、取って、取ってー！

トシキ どれどれ

ヨネコ、木に片手を付いて、片方の靴の裏を上げている。  
トシキ、ヨネコに近づき、上げている靴を持つ。

ヨネコ ちよつと、上げすぎ！こける！

トシキ ごめんごめん

ヨネコ 早く取って！

トシキ はいはい、取れたよ

ヨネコ あーもう気持ち悪い

トシキ、取ったものを見る。

トシキ ・・・きのこ？

ヨネコ きのこ

トシキ うん

ヨネコ ・・・やっぱりね

トシキ ほれ

トシキ、きのこをヨネコに投げる。

ヨネコ　ぎゃあ！もー

トシキ　きのこだよ、きのこ

ヨネコ　もー

トシキ　はは、登れる？

ヨネコ　当たり前でしょ

トシキ　ふふ

ヨネコ　ここからは、木も多いし、下もゴツゴツですよ

トシキ　本当だ、暗い

ヨネコ、トシキの手を取って歩き始める。

トシキ　・・・おお

ヨネコ　足元、気をつけて

トシキ　・・・

ヨネコ　どうしました？

トシキ　いや

ヨネコ　何か、獣でもあります？

トシキ　いや

ヨネコ　手、汗ばんでる

トシキ いやごめん、右手は特に汗がね、あれ？こっちは左か？

ヨネコ 繋いでる方ですか？

トシキ おお

ヨネコ 左手でしょう

トシキ ヨネちゃんの手が？

ヨネコ 栗屋さんの方です

トシキ これ、本当に左手か？

ヨネコ 何言ってるんですか？

トシキ 箸を持つ方が右か？

ヨネコ そうですね

トシキ じゃあこっちは左だ

ヨネコ あれ、左利きでしたっけ？

トシキ 違うよ！

ヨネコ どういうことですか？

トシキ 右とか左とか誰が決めたんだ！

ヨネコ ・・・・変な人！

トシキ いや・・・

ヨネコ 栗屋さん？

トシキ いや

ヨネコ どうしたんです？

トシキ いや、あ、いやその、ヨネちゃんは、あれか？こういうの慣れとるんか？

ヨネコ だから何回も登ってるって

トシキ 高塔山のことやないで、いや、いや、いやいや

ヨネコ 「いや」ばかり

トシキ 何でもない

ヨネコ そうですか・・・

トシキ ・・・・

ヨネコ 私、大好きなんです

トシキ 俺もだよ！

ヨネコ え、でも登ったことないって

トシキ へ？

ヨネコ え・・・あらいやだ、そういうことじゃないですよ

トシキ え、違うの？

ヨネコ 高塔山からの景色ですよ

トシキ え、ああ、ね

ヨネコ もう

トシキ ははは

ヨネコ 小さい頃から良く登ってたんです。頂上で視界が開けると、洞海湾に船の明かりがぼつぼつ点いてて、その先には八幡や戸畑の明かりが沢山、まるで地上の天の川なの。空も陸もお星様が輝いているようで、とても素敵なんです

トシキ ふーん

ヨネコ え、興味ありませんか  
トシキ いや、あるよ、ある  
ヨネコ そうですか  
トシキ ちよつと先が明るいね  
ヨネコ あ、もうすぐ頂上です  
トシキ 来た来たー！  
ヨネコ ちよつと早足で行きますか？  
トシキ よし

ヨネコ、トシキを半ば引つ張るかたちで歩くペースを上げる。  
暗い道を抜けると、それまで覗いていなかった星空や、月の明かりが  
二人を照らし出す。

ヨネコ 着きました  
トシキ おお、来たなー  
ヨネコ そこ、あそこまで行きましょう  
トシキ あ、手……いいよ  
ヨネコ え、ああ

ヨネコ、トシキの手を離す。  
ヨネコ、スタスタと目的地まで歩き出す。

トシキ、それに付いて行く。

ヨネコ　ここ  
トシキ　ほー

二人、洞海湾側を見下ろす。  
トシキ、かなり見入っている。

ヨネコ　ねえ、栗屋さん

トシキ　ほー

ヨネコ　ねえったら

トシキ　右側のあれ、大きいなー

ヨネコ　ああ、製鉄ですか、ああ皿倉山？

トシキ　違うよ、あの出来かけの橋

ヨネコ　え？

トシキ　あれ、日本一ってね

ヨネコ　だから

トシキ　おおー！見てみ！八幡の街があんなにキラキラ

ヨネコ　あの、なんで、手を

トシキ　ほー！

ヨネコ　・・・もーいい

トシキ、急に右手でヨネコの左手首を握る。

トシキ  
ヨネコ

え

トシキ  
ずっと俺の左におってくれ

ヨネコ  
・・・今は右ですけどね

ヨネコ、トシキの左側に移動し、トシキの手を取った。

## 籠の中の男たち

作 脇内圭介

### 【登場人物】

勘太・・・若い船乗り

洋平・・・若い船乗り

昭和27年秋、太平洋に給水船が一隻浮かんでいる。

勘太はひとり船室におり、日誌を書いている。

その横には小さな箱がある。

勘太、立ち上がり日誌を朗読し始める。

勘太

40日目。ふと目を開けると今日も金色の天井が僕を見下ろしていた。いい朝だ、最高の一日がまた始まろうとしている。ひとつ大きく息を吸うと、かぐわしい花の香りが鼻を抜け、肺に入ると僕の幸福感を膨らませていく。少し頭を起こし下に目を移す。そこには見慣れた赤と白のバラの刺繍が施された見事なカーテンが静かに揺れ、隙間からは暖かい光が差し込んでくる。この様子じゃあ船長はウイスキーでも引っ掛けながら舵を取っているに違いない。それでもかまわないじゃないか、今日くらい200人の従業員

員と酒宴を開いてみてはどうか。お客という立場ではあるが僕は本気でそう思ってしまう。なぜなら僕の心は財布と同じく、いやそれ以上に大きくて余裕があるのだ。右に目をやるとブロンドの髪を横たえクリスティーヌが天使のように眠っている。そのピンク頬に起きぬけの接吻をする。クリスティーヌは目を閉じたまま僕に微笑みかけ、こう言った「なぜ口にしてくれないの？」僕はすぐにその口を塞ぎ、そのままクリスティーヌを抱き寄せた。豪華客船での優雅な一日が始まった。

船が大きく揺れ、勘太も倒れそうになる。

外は激しい雨が降り時折雷が鳴っている。波も高い。

勘太、小さな箱を大事そうに抱える。

勘太

見ろ！天井は赤さびだらけ、漂う匂いは塩の匂いと男の汗の匂いだけ！最近じゃあ鼻毛と鼻くそが詰まって匂いすらなくなった！そこに見えるはカーテンなんか小さい丸い窓！船長は俺！というか乗員は俺合わせて2人。このまま転覆すりゃあ骨も探せないだろう、まるで棺おけの中にいるようだ！この給水船にあるのは他の船に供給する水、洋平、俺。それ以外なんにも無い空っぽの揺れる棺おけだ。陸が恋しい、父と母が恋しい、なにより女が恋しい！しかし！俺には、彼女達がいる

箱から虫を一匹つかんで掲げる。

鈴虫の音がする。

勘太

ミチコ。かわいいミチコ。この鈴に似た声を聞くと僕の心は洗われる。どんな荒波に心が荒ぶろうとも洗われる。一匹20円もしたが安いもんだ。子供の頃、何気なく聞いていた虫の音が、まさか船の上で女神様に化けるとは思いもしなかった。(箱をまた開けて)そして、こっちが・

船が大きく揺れ、勘太が転ぶ。

その拍子にミチコが何処かになくなってしまふ。

船室の外にいる洋平、慌しく船室の前に行き、窓などがついていない船室の扉を開こうとするが、鍵がかかっている開かない。

勘太、扉を叩く。

洋平

おーい！おーい！

勘太

ウソだろう？どこだー！

洋平

おーい！ちよつとー！

勘太

どこだー！こっちかー？

洋平

(扉を叩き) こっちだー！鍵！鍵開けてくれー！

勘太

ダメだ！すまんが静かにしてくれないか！

洋平

んん？鍵、(扉の端を叩き) こっこ辺りのやつ外せばいいだけだつて！

勘太

ドンドンドンドン、うるさいよ！

洋平　　なんで怒ってるんだ  
勘太　　びっくりしちゃうだろ！  
洋平　　どうしたんだ？早く開けてくれ！寒い！  
勘太　　開けられないんだよ！  
洋平　　だから（扉を叩き）ここ！ここに！つまみがあるだろ！  
勘太　　あるよ！  
洋平　　おお？だから！  
勘太　　開けたら、扉ひらくんだろ？  
洋平　　え、開くよ！台風だぞ、外は！  
勘太　　じゃあ外で待ってる！  
洋平　　俺なんかしたか？

船が大きく揺れる。

洋平　　わああ！  
勘太　　おおお！  
洋平　　あぶねえ！  
勘太　　ミチコー！  
洋平　　入れてくれ！！  
勘太　　こっちなー？

洋平、扉を叩く。

勘太、依然として低い姿勢でミチコを探している。

洋平 何かはわからないが、すまなかった！開けてくれー！

勘太 だからうるさいって！

洋平 こっちは命がかかっているんだぞ！

勘太 こっちもそうだよ、ミチコー？

洋平 ミチコ？女？

勘太 あ・・・

洋平 おい、お前、そこで何してんだ

勘太 いや？ミチコをね

洋平 ミチコってなんだ・・・おい、お前さては

勘太 実は、な

洋平 おおお・・・なんだよそれ

勘太 あまり教えたくはなかったんだが

洋平 この40日間、何処にかくまっていたんだ！全然気づかなかった！

勘太 小さいからな

洋平 小柄なのか、かわいいじゃないか！

勘太 だから、ちよつと待て

洋平 いや、待てない！こっちはシケで死にそうなのに、そっちはミチコちゃん

洋平 が、「いゃん、死にそう」ってか？楽しいことしゃがって！

洋平、扉を叩く。

勘太 全然楽しくないよ！ミチコー

洋平 おいおいおい！それミチコ「さん」に失礼だろ！

勘太 ミチコでいいよ

洋平 うおー！ミチコー！女ー！

勘太 どっちかと言えばメスだよ

洋平 はああ、お前やるなー！ひゅーひゅー！

勘太 ちよつとさ、声聞きづらいし、びっくりしちゃうからさ、静かにしてって！

洋平 ああごめん、て！おい！今、その・・・最中なのか？

勘太 だから探してるんだって！

洋平 サガ、してる？サガ、してる？性と書いて「サガ」と読ませて、それを、

勘太 してる？俺もサガしてええ！

勘太 何を言ってるんだ？

洋平 (扉を叩き) 見せろ！見るくらいいいだろ！

勘太 待ってって、まだ出てきてないんだよ！

洋平 うおー船の中でなんてことを

勘太 声聞いと癒されるからねー

洋平 ああ！いやらしいなお前！

勘太 なんでそうなるんだよ

洋平　くそー俺だってこんな船中で何十日も缶詰で、溜まってんだよ！とにか

く開けろ！

勘太　開けて逃げちゃったら危ないだろ！

洋平　逃げるわけないだろ！イチャイチャしやがって！

船が大きく揺れ、海水が洋平にどぼつと降りかかる。

船室では航海日誌の山が崩れる。

洋平　うわ！

勘太　おお！

洋平　びちゃびちゃだよ、くそー！そっちもそうなんだろ？くそー

勘太　おおおお！

洋平　お？おい、今の弾みで、出たのか？

勘太　出てきてない！航海日誌の山が崩れた！

洋平　さっさとしろよ、波がすごいことになってるんだよ！

勘太　もうちよつと、もうちよつとだから

洋平　そういうのいいんだよ！

勘太、日誌の山があった裏側に小さな影を見つける。

勘太　あ！いたいた、いたいたいた！

洋平 え？え？なに？そんな激しいことしてるのか？ミチコー！  
勘太 いたー

勘太、ミチコを捕まえる。

洋平 い、いった、のか・・・？

勘太 もーよかったー

洋平 くっ！

勘太 ワカコー？ほら、ミチコだよーよかったねー

洋平 ワカコ？え、ワカコ？

勘太 ああ、2匹飼ってたさ

洋平 2匹？お前虫じゃないんだから

勘太 ん？虫だよ？

洋平 やめろ

勘太 ちよつと待って

洋平 ミチコ、ワカコ、ミチコ、ワカコ

勘太、扉の鍵を開け、洋平を中に引き入れる。

洋平、入った後すぐに扉を閉める。

洋平、ぶるぶる振るえながらもニヤニヤした顔で船室を見渡している。

洋平 ……あれ？  
勘太 うわーびしょびしょだ、ごめん  
洋平 女は？  
勘太 ああ

勘太、手に持ったものを見せる。

洋平 え、うわ  
勘太 こつちがミチコで、ワカコがこつち  
洋平 え……これが？  
勘太 え？  
洋平 虫じゃないかよ  
勘太 うん、虫だよ  
洋平 どこで、え、どっから入ってきた？  
勘太 買ったんだよ、あの、若松の子供たちから  
洋平 ああ……おつたなそんなの  
勘太 お前いらんつちいうけさ、こつそり買っちゃった  
洋平 それ、メス？  
勘太 うん、メス  
洋平 ……

勘太 かわいいでしょー声もかわいいんだー  
洋平 それ、オスだよ  
勘太 え？  
洋平 オスしか鳴かないんだよ、鈴虫  
勘太 え、うそ、じゃあ・・・ミチオだ  
洋平 女どこだ！女！女！女！

鈴虫が鳴き始める。

りりりりん、りりりりん

洋平 ・・・・あと、何日で若松だ？  
勘太 10日かな  
洋平 それ、一匹、いくらだ？  
勘太 20円  
洋平 ・・・・そうか  
勘太 ミチオ、あげようか？  
洋平 え、いいのか？  
勘太 大事にしてくれるなら

雨が止み、船の揺れも急に収まった。

鈴虫の声だけが静かに聞こえている。  
二人、鈴虫を見つめている。



## 【平成27年度 公演情報】

北九州芸術劇場＋市民共同創作リーディング

### 「Re:北九州の記憶」

日程：平成27年12月19日（土）・20日（日） 14時 会場：北九州芸術劇場 小劇場

〔作・構成・演出〕 鵜飼秋子（さかな公団）

〔作〕 穴迫信一（ブルーエゴナク）、塩津順子（のこされ劇場≡）、守田慎之介（演劇関係いすと

校舎）、脇内圭介（飛ぶ劇場）

〔ドラマドクター〕 内藤裕敬（南河内万歳一座）

〔インタビュー協力〕 阿波八郎さん、恵原起世子さん、川村元治さん、小坂リツ子さん、鶴田伶子さん、

比江島實千江さん、山間友彦さん、立野幸さん

〔出演〕

青木裕基（飛ぶ劇場）、内山ナオミ（飛ぶ劇場・さかな公団）、高野由紀子（演劇関係いすと校舎）、寺田剛史（飛ぶ劇場）、松本未来（じあまり）、宮村耳々、守田慎之介

「スタッフ」

照明…遠藤浩司\* 音響…松岡大志郎\* 衣裳…内山ナオミ（工房MOMO）

演出部…小笠原敬子 照明操作…大崩綾\*、太田勝之 音響操作…杉山聡\*

舞台監督…谷川哲朗\*

宣伝美術…トミタユキヲ（ecADHOC）

広報…鬼木身和\* 票券…福本紗代子\*

制作…吉松寛子\*、加賀田浩二\* 劇場支配人…濱野佳代子\*

プロデューサー…津村卓\*（\*||北九州芸術劇場スタッフ）

主催…（公財）北九州市芸術文化振興財団 共催…北九州市

助成…平成27年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

企画・製作…北九州芸術劇場